



四年に一度の統一自治体選挙が終わった。今回は、私も民主党千葉県連代表として、自治労組織内の網中県議をはじめ、できるだけ多くの仲間の応援に入るよう努めたが、四年前の前回にも増して色々と考えさせられる選挙であった。ここでは特に二点、申し上げたい。

第一に、民主党公認で選挙に出る意義についてである。民主党に対する不満や不安を抱えながらも、政権からの転落後の最も苦しい二年余りを共に耐え、精進して来た今回の現職候補者の多くは、前回よりも票を伸ばしており、また勇気ある新人の多くも勝利を収めた。これで千葉の民主党の退潮には歯止めが掛かったのかどうか、評価は分かれようが、大事なことは、これからの四年間で有権者の方々に、「やっぱり民主党の議員を選んでよかった」と実感して頂けるかどうかである。そして、その鍵を握るのは「連携」である。

中央区の網中県議の例で見てみる。四年前と同じ三位当選ではあったが、その中身は瞠目に値する。一位と二位を占める自民党がそれぞれ1,000票、1,300票以上の票を減らし、他の候補者らが2,700票以上の票を減らした中で、網中氏ただ一人が5,300票近く票を伸ばしている。しかも、投票率が3ポイント（千葉県全体の数値）下がった中でである。もちろん本人の実績・努力と支援者、支援団体の努力が最大の勝因であったのは言を待たないが、他の候補者とのもう一つ大きな違いは、党幹部の連日の応援を通じた「連携」のアピールである。

今、肝心なことは、各議員らが、選挙の際にアピール出来た、そして有権者からの一定の評価と期待を受けたその「連携」を、これからの四年間の政策遂行の具体に於いてもアピール出来るかどうか、である。確かに議員数では、我々はまだまだ自民党に大きく水を開けられている。しかし、比較少数ながらも野党第一党として、政策本位に機動力を発揮することは十分に可能だ。いや、政策課題が益々複雑化する今日的な政治環境では、むしろ県議と市議と国会議員とが連携して政策課題に取り組むことは必要不可欠になって来ている。

選挙が終わるや否や、早速その連携が試されるような難題が降って湧いた。いわゆる指定廃棄物の処分地問題である。環境省が、放射能に汚染されたゴミの最終処分地として、あろうことか東京湾に面した埋め立て地を候補に挙げてきたのだ。多くの関係者にとって寝耳に水どころか、地震や津波のリスクを考えれば常識的には考えられない選択だ。そして、まさにこうした難題こそ、私たちの頑張りどころでもある。千葉

市や千葉県はもちろんのこと、お隣の市原市も、また現在ゴミの仮置きを余儀無くされている松戸市なども、しっかりと連携して問題解決に向けて一歩でも二歩でも前進していきたい。

第二に申し上げたいのは、緊張感の無い議会と、低投票率についてである。両者はコインの裏表であるのは言うまでもない。候補者が少な過ぎて無投票が続出する現象も、女性の候補者が少ない現実も、根っこは同じである。マスコミから有ること無いこと何でも言われる（書かれる）国会とも違い、暮らしに直結する制度の改変で住民が関心を高めることも多い市町村議会とも違い、今や県議会の「困難性」が際立っている。

暮らしとの繋がりが見えにくい。だから、誰も関心を持たない。だから、選挙に行く意味が分からない。だから、立候補なんてとんでも無い。だから、ノーチェックがあたりまえ。だから、議会に緊張感は生まれようがない。だから、身を切る改革などもってのほか。だから、議員定数削減は当然否決。だから、多数派のやりたい放題。だから、県の職員にとっては天国。だから、県民の税金は無駄遣いが止まらない。とまあ、こんな悪循環が長年続いてしまっている。

では、解決の糸口は無いのか？ そんなことはない。網中県議が選挙ビラや演説で訴えたように、「情報公開」こそ最大の武器である。私も選挙応援をしながら、色々とは知らなかったことを学んだ。例えば、銚子市と印西市との間に存在する県議定数の逆転現象は、圧巻である。民主党の県議団には、野党第一党らしく、県民の皆さんに対して、これからも県議会や県政の「不都合な真実」を次々に明らかにして欲しい。そうすれば、誰も無関心ではいられなくなる。そして、必死に県民のために頑張る議員だけが生き残れる議会に、時間は掛かっても生まれ変われるはずだ。

今回の選挙では、ある自治体議員選挙で、若手議員にだけ歳費を増額する制度を設けて、若手の立候補者を増やそうとした議会が注目された。今の歳費では家族を養っていけない、という声に対する一つの解であり対応策であった。また、別の自治体では、夜間や週末の議会開会を推進することで、多様な職業人が兼職で議員になることを推奨している。欧州ではボランティアの地方議会も多いと側聞する。対照的なアプローチだが、いずれの方向性も充分検討に値するはずだ。そして、いずれの試みも検討せず、ズルズルと今のやり方を続けるその先には、民主党にとっても、そしてもちろん国民にとっても、地方政治の明るい未来は無い。